

は、自分の分野の研究伝統にどうしても縛られ視野が狭くなりがちなのを、他の伝統を持つ研究者と協同研究することにより視野を拡げようというところにある。言語、文学だけでなく、思想史や文化の分野でも同様の多学際研究、それもスウェーデン内の諸大学だけではなく北欧、ヨーロッパのベースでプロジェクトを組むのが奨励される傾向になっている。その方が研究基金も貰いやすいのである。

また、大学間の協力と役割分担ということも今検討されている問題である。ヨーテボリ大学の例をとると、スウェーデン西海岸地区の協調を緊密にしてゆくという方針で、特にノルウェーのオスロ大学とは特別協定があり、学生、研究者の交流を深めようとしている。そのための基金も両大学内に設けられている。これは東海岸にあるストックホルムならばバルト諸国との協調に力を入れるし、南の Lund ならばデンマークや他の近辺の大学と強力するというふうである。

大学改革の波はこれからもまだいろいろやってくることと思うが、最近特にアメリカの動向に平行してスウェーデンにも多少類似の変化が導入されるように思われる。大学教育をいかに合理的、効果的にするかといった評価の問題などその好例ではないだろうか。こういったことも大学が少数のエリートのためのものから大衆のものになったことと関係しているわけだが、昔の象牙の塔に閉じこもって研究だけに励む研究者のイメージは完全に過去のものになって久しいというのが、大学関係者の実感ではなかろうか。

ペツォルド旧蔵の巻物コレクション

ジョン・M・ローゼンフィールド
ハーバード大学 名誉教授

ハーバード・イェンチン図書館は、無名とはいえ価値のある様々な研究資料を所蔵しています。ブルーノ・ペツォルド (1873-1949) の遺品の中から1951年に図書館に入った日本と中国の巻物350余巻もそのひとつです。ペツォルドはドイツのドレスラウに生まれ、コルニシェン・ツァイトウングの海外特派員として1910年来日しましたが、第一次世界大戦が勃発すると、名門第一高等学校で独語および独文学を教え始めました。日本の風習に非常に興味を抱き、特に天台仏教に惹かれたペツォルドは、日本の著名な高僧や学者の指導を受けながら、天台教学の研究に打ち込むようになります。熱心さが認められ、ペツォルドは次々と天台の僧位を授与され、1948年には最高位の僧正を授けられるまでに至りました。

ペツォルドは英語と独語で、天台仏教の歴史、日蓮宗、および仏教一般に関して幅広く執筆しました。また、ペツォルドは一万冊を超す文献を収集して研究図書館を作り、第二次大戦の焼夷弾からもその蔵書を守り抜きました。ペツォルドの死後、息子のアーヌルフが、その蔵書中、貴重な17世紀の押印を含む中国語と日本語の本をイェンチン図書館に売却し、巻物は本に付随するようなかたちでイェンチン図書館に入りました。それ以外の洋書は、キャンベラにあるオーストラリア国立図書館と東京の国学院大学に収蔵されました。

ハーバード大学では、ペツォルドの本はすぐにイェンチン図書館の蔵書に組み込まれましたが、目録作成が困難であった巻物の方は入念に梱包され、そのまま置かれました。二年前、新しく図書館司書となったジェームズ・チェン氏と日本語コレクション担当のクニコ・ヤマダ・マクヴェイ氏

が収蔵されたままの巻物を発見し、その保存修理の手配を行いました。昨年の夏、教授陣と図書館職員がチームを編成し、巻物の正式な目録作成を目指した予備調査を行ないました。

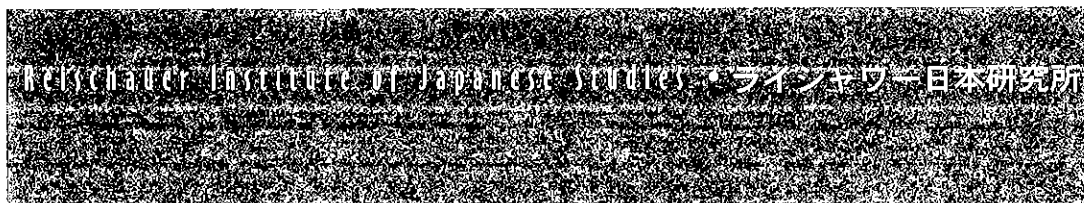
調査の結果、巻物の75パーセントは日本のもの、残りが中国のもので、教材、研究対象として非常に豊かな内容を持つことが判明しました。ペツォルドの天台仏教への傾倒を反映し、その中には天台祖師画、延暦寺と寛永寺の当時の高僧の書、および六道図のように教義を図示したものが含まれています。しかし、収集者ペツォルドが広範な興味を持っていたため、巻物の種類は真言宗、禅宗、日蓮宗、浄土宗を含む日本の仏教のみならず、神道、心学、およびその他の民間信仰にまで及んでいます。ペツォルドは芸術性の高い名品を捜し求めたわけではありませんでした。収蔵品の多くは秀作で、意匠も興味を惹きますが、それらの巻物はまず生きた信仰の目に見える証として非常に価値のあるものであり、そのために、学部、大学院を通じて格好の教材となるのです。

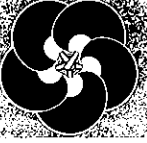
巻数が多くその主題も多岐にわたるため、巻物すべての写真を撮って目録を作成し、その情報をオンライン化するにはさらに数年を要するでしょう。それまでの間、巻物はイェンチン図書館の稀覯本部門で保存されています。

現代日本資料センター 古地図画像アーカイブ 情報

坂口和子

画像のデジタル圧縮技術の開発によって、世の中のデジタル化の波は文化財や資料の保存にまで及んできた。高精細な画像データを使って、貴重な文化財資料をデジタル映像化し、データベースに構築したうえで、その維持、管理、保存に役立てるとともに、インターネットを通して広く一般に公開し、人類の文化遺産を次の世代へ





継承しようというものだ。このデジタルアーカイブの動きは、昨今のインターネット流行りで、このところ各地で富みに活発化し始めた。どこの図書館や美術館あるいは博物館も、膨大な数の文化資料や貴重な文化財をかかえている。しかし、常設や展示会など一般公開に浴する機会のあるものは稀で、収蔵庫の中でひっそりと埃を被ったまま忘れ去られている例も少なくない。展示するにもスペースの問題でままならないという。その点、デジタルアーカイブは時間や場所の制約を受けることもなく自由にアクセスできる。コンテンツを提供する側だけでなく利用者にとっても魅力的である。今回は、そのような貴重資料の中で、今静かなブームとなっている「古地図」に焦点を合わせた画像デジタルアーカイブを紹介したい。

大日本沿海輿地全図 (国立国会図書館デジタル貴重書展特別展示)
<http://www.ndl.go.jp/exhibit/50/html/wb39-6/mokuji.html>

日本最初の近代的な実測による全国図として知られる、伊能忠敬(1745-1818)の『大日本沿海輿地全図(だいにほんえんかいよちぜんず)』は、一般に「伊能図」と総称され、縮尺によって大図(1/36,000)、中図(1/216,000)、小図(1/432,000)の3種類がある。中でも詳細な部分図である大図の写しは殆どが焼失し、日本国内には60枚程度しか現存しないという。ところが、昨年、奇しくも伊能忠敬が日本全土の測量を開始してちょうど200周年に当たる意義ある年に、大図の写本206枚(その後の調査で207枚と判明)が、ワシントンの米国会図書館で発見された。現在、里帰りの展覧会を準備中だというが、国内に現存する幻の伊能図はデジタルアーカイブで見ることが出来る。

国立国会図書館が所蔵する『大日本沿海輿地全図』は明治期の写本で、気象庁から寄贈された大図43枚の模写図すべてを高精細画像で公開している。そもそも地図は視覚に訴える情報でもあるから、画像データベースにはうってつけ

だ。利用者が貴重資料である地図に直接触れることなく何度も好きなだけ見ることができ、破損や劣化の心配もない。また、地図はただ保存されるだけで有効に活用されなければ意味がないが、その点、デジタル化された地図情報は多様な活用方法が可能である。「国立国会図書館貴重書電子展示プロジェクト」の一つとして構築された『大日本沿海輿地全図』は、多様な検索機能や画像表示を持ち、同プロジェクト内部におけるクロスレファレンスや、詳細な解説を付すなど細やかな配慮がなされている。大図の部分図名一覧の他に、古地名、現在の市区町村名、及び自然地名のいずれからでも入れる地名索引が充実している。さらに自然地名索引の配列は、山岳、河川、島嶼、湖沼、岬というように、地形別の五十音順で一覧リストが設けられ、43枚の大図がカバーする内容を一目で閲覧できるのは重宝だ。画像の種類は結合図、全図、拡大図があり、順に画像をクリックすると、全体結合図を上中下と3分割した図にジャンプできる。

長崎古地図データベース (国際日本文化研究センター)
<http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/nagasaki.htm>

国際日本文化研究センター(日文研)による「長崎古地図データベース」は、長崎市立博物館が所蔵する長崎古地図をデジタル化したもので、現在221点収録されている。いわゆる「博物館もの」であった古地図が、JPEG イメージによる鮮明な画像として甦り、何時でも何処からでも気軽にアクセスできるようになったことを大いに歓迎したい。但し、他の日文研の画像データベース同様、アクセスは無料だが学術研究目的のみに限り、事前に登録する必要がある。画像データベースとしての機能的特色は、前号のこの欄で紹介した日文研の「古写真データベース」とほぼ同じだが、「古写真データベース」で見られたトランケーション機能はない。しかしながら、現在公開されているいずれの機関の古地図データベースにもこの機能はなく、デジタルマップとしてのブラウズ、一覧リスト、個別目

録など、バランスよく利用しやすい形でデザインされたデータベースの枠組みは秀逸である。検索経歴が画面の上に表示され、フリーキーワードのみの「簡易検索」及び、キャプション、制作者名の他に、刊本、写本、原本などの「種別」や、和暦・西暦のいずれからでも入れる「制作年」を限定することや、紙本着色、色刷、印刷、青写真、墨画朱書、銅版画着色といった「形状」を組み合わせて絞り込むなど、ここで紹介した古地図データベースの中では最も使い勝手がよく、充実した検索機能を有する。また、キャプションは英語でも表記されているので、日英いずれの言語でも検索できるのはありがたい。

近世古地図・絵図コレクション
 伊能図・日本図(徳島大学)
<http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/~archive/index.html>

「近世古地図・絵図コレクション」は、総数200点を越える徳島大学附属図書館所蔵の貴重本のうち、近世古地図・絵図を集めたもので、徳島ばかりでなく、江戸、京都、全国、諸国、世界の絵図をはじめ、国絵図、郡絵図、村絵図、河川絵図などを含む。旧徳島藩主・蜂須賀家旧蔵のコレクションなどもあり、郷土史関係では貴重な資料を提供する。美術的にも興味深いものが多く、鳴門のうず潮を描いた『阿波国大絵図』などは保存状態もよく逸品である。現在のところ収録数が少ないため検索システムは持たないが、将来的には多様な検索ができるよう古地図の属性データ分類は20項目にも及ぶ。また、同種の古地図データベースでは他に見られない特色として、サムネイル一覧や、各地図の目ぼしい個所の部分拡大図へもフロントページからジャンプできるなど、使い易くデザインされている。さらに、参考文献に関する書誌データや、詳細な解説及び背景調査事項を提供するなど、体系的に学習・研究できるような配慮もある。本格的なデジタルアーカイブとしての活動意欲を盛り込んだ画像データベースといえるだろう。





芦田文庫古地図コレクション
(明治大学図書館)
<http://www.lib.meiji.ac.jp/ashida/display/exhibit-2001/contents.html>

明治大学図書館の「芦田文庫古地図コレクション」は、日本地誌学の先駆者である蘆田伊人(あしだ・これと 1877-1960)の蒐集した日本図を始め、中国・朝鮮、世界図や、江戸時代の地誌、地理書など、総計約2,500点から成る。江戸の初期から昭和年代にまで及ぶ半数近くが近世図で、地方図が9割、手書図が3割を占める。近世の地誌を集成した『大日本地誌大系 全40巻』(1929-1933 雄山閣)の編纂者としても著名であった、蘆田伊人の審美眼を反映するコレクションは、学術的価値ばかりでなく、美術的価値も高く評価されており、明治大学では現在も年度計画で日本の古地図を追加購入して、そのユニークなコレクションの充実・発展を図っているという。フリーキーワードの入力方式ではないが、検索は地域別、及び年代別でコードで分類されており、クリックするだけで検索結果が得られるので使いやすい。画像は中精度画像と高精度画像の2種類がある。制作者の美意識や時代感覚、あるいは価値観などを如実に反映する古地図を読み解くには、社会史、美術史、宗教史などの幅広い知識を要する(竹田博志)といわれるが、「芦田文庫古地図展電子展示」の特筆すべき点は、解説及び書誌事項が極めて充実していることだ。また、これとは別に、各画像地図の見所や問題点を論じた蘆田文庫編纂委員会のメンバーによる中間報告 (<http://www.lib.meiji.ac.jp/ashida/articles/report-2000/preface.html>) も公開されており、興味のある読者は参照されるのもよいだろう。

地図に見る江戸八百八町 (東京大学図書館)
<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai96/index.html>

江戸時代に隆盛した、木版による大名屋敷や武家屋敷の名などが記入された携帯区分地図は、当時の人々にとって実用的な道具とし

て使われた。「切絵図」と呼ばれるこの印刷地図は、実測に基づいたものではないため、デフォルメや誤記、省略が多く、今日の東京地図の基礎データとしてそのままでは使えない。しかし、所詮、地図は絵であり、図である。多色刷りで美しく仕上げられた「尾張屋版江戸切絵図」など、独特の色合いと抽象化された図案は、現代人にとって一種の美術品としての受け止め方をされ、今熱い視線が寄せられているのも不思議ではない。東京大学の「地図に見る江戸八百八町」は、江戸初期から明治初年にいたる間に、いろいろ工夫をこらして出版された江戸の市街を表す色鮮やかな切絵図を集めたものである。もともと展示会の図録として準備されたため、各図の解説は充実しているが、残念ながら画像解像度は一種類のみで検索機能もない。「江戸学」は最近多くの関心を集めている研究分野であり、また、地図は無数の情報源でもあるため、画像を単に見せるだけではなく、デジタルアーカイブとしての機能を果たすことが可能な、多様な活用方法を持つ画像データベースとなることを期待したい。

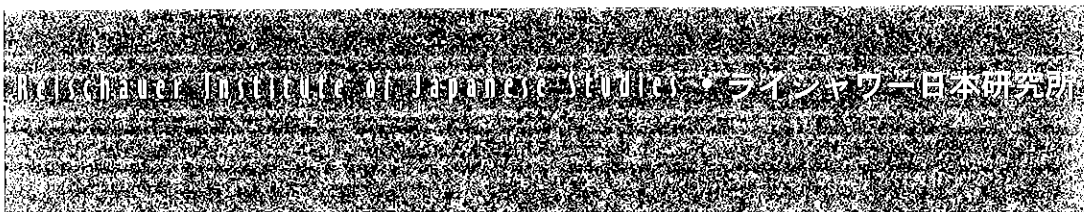
『江戸東京古地図散歩』(発行: エービーピーカンパニー)
<http://www.app-beya.com/>

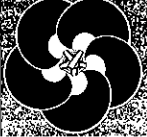
一方、オンラインではないが、「尾張屋版江戸切絵図」から江戸の世界を覗いてみようという趣旨で、グラフィックデザイナー・イラストレーターの中川恵司氏が制作したCD-ROM版が市販されている。江戸時代の古地図と現代の数値地図をコンピューター上で重ね合わせ、江戸全域の地図とそれに対応する現在の地図との照合ができるのがユニークだ。この画期的なオフライン版は、興味尽きない地勢情報と歴史をリンクさせたもので、地図を見る楽しみばかりでなく、実際に地図上を歩いて、多角的な地図情報や江戸時代の常識などを理解するのに役立つ。内容の充実度もさることながら、最近の映像文化で育った利用者に満足いくようなゲーム性やエンターテインメント性があり、印刷した地図

では出来ない江戸と東京の自由な往復という、デジタルだからこそ実現できた表現方法や機能が満載されているのが特長だ。尾張屋版切絵図との比較や、安藤広重の江戸版画の推定スケッチ地点など、江戸のランドマークや、江戸時代特有の社会情報や都市づくりの解説もあり、江戸探訪必携のツールといえる。21世紀の新しいメディアを通して、古地図に再構築された近世江戸の世界に一時タイムスリップしてみてもおもしろいであろう。時代小説の舞台を重ね地図上で散策することができれば、小説の主人公や江戸文化をより身近に感じることもできるに違いない。

北方古地図 (北海道大学図書館)
<http://libserv2.lib.hokudai.ac.jp/125/map.html>

地図は軍事的な意味でも重要視され、江戸時代においては国外持ち出し禁止とされていた。シーボルト事件に代表されるように、地図は時代の政治的・社会的状況と無関係であることからまぬかれなない。蝦夷地と呼ばれた北海道は、長い間その実態を知られることなく、その地を支配した松前藩さえ正確な地理認識を持たなかった。しかし、ロシアの蝦夷地周辺に対する野心が顕著になってきた18世紀半ばになって、ようやく日本人の地理的視野に入るようになる。「北方古地図電子展示」は、北海道大学創立125周年記念事業の一環として展示した北方資料室所蔵の古地図を電子化したもので、蝦夷地から北海道へと変遷する過程を辿ることができる。江戸幕府の命によって制作された『元禄国絵図』(1700)では、蝦夷地はまだ南北に伸びた楕円形で表わされており、当時における松前藩の北方認識の程度を伺い知ることができ興味深い。高精細画像で公開されているのは「北方古地図展」のごく一部であるため、現在のところ検索機能はないが、階層化された画像データを持つFlashPixというファイル形式を用いて、解像度の高い画像配信ができる工夫がなされている。さらに、他では見られ





ない特長として画像の位置操作機能があり、「パン」と呼ばれるアイコンをクリックすると、画像の上下左右はもちろん斜め方向へも自由に移動することができる。

西洋古版アジア地図（大阪大学附属図書館）
<http://www.library.osaka-u.ac.jp/tenji/maps/maps.htm>

測量技術が未熟な時代、地図は主として伝聞と推量で作られた。古地図は書き手の宇宙観を反映したものとされる所以でもある。大阪大学の「西洋古版アジア地図」は、17世紀から19世紀にかけて西洋で発行された、日本、中国、朝鮮、シベリアなど、東・北アジアの地図約100の画像を収録する。西洋人のアジア地理知識あるいは世界観の変遷を知る上で貴重な資料といえる。検索機能はないが使いやすいデザインで、年代順に配

列された右ページの地図一覧で希望する制作者と地図名をクリックすると、左ページに中サイズの地図が書誌事項とともに現れ、ここからJPEG形式のフルサイズ画像へ移行できる。ちなみに、ここに収録されたものの中で一番古いポルカッキの『アジア図』（1572）から、第84番目のウォーカーによる『日本図』（1835）まで、北海道は地図上に記載されていない。また、地図編集で世界的に名高いジョン・パーソロミューが制作した『日本、満州、千島図』（1864）では、日本やサハリンの地図が正確に表わされている反面、朝鮮半島が退歩した図形になっているなど、19世紀後半においてもなお、西洋の地理的極東認識は曖昧であったことが伺われる。

文化遺産としての貴重資料を、ネットワークを通して仮想的に公開するというデジタルアーカイブ

の活動によって、それまで死蔵となっていた古資料が解き明かされ、新たな命が吹き込まれて、誰でも気軽に楽しめる私たちの生活に身近な存在になってきた。「歴史的遺産や情報の共有化と継承化」というアーカイブ本来の理念も、広く一般の人に届けられてこそ実現可能となるだろう。これまで日本のアーカイブの整備状況は立ち遅れているといわれてきたが、IT（情報技術）革命が、市民生活に根づいた本物のアーカイブ活動を支援するきっかけとなれば幸いである。

（最後に、本稿のテーマ選択に際しては、長崎大学附属図書館情報管理課の喜多芳明氏よりヒントを得たことを付し、紙面を借りて感謝の意を表したい。）



讃洲小松庄
 五福寺
 一 聖徳太子御自述書之
 一 聖徳太子御自述書之
 一 聖徳太子御自述書之

法然本持身大勢至菩薩
 為度衆生故頭置此道場
 教每日觀向攝護
 端恆慮必引導
 換樂者成此類
 念不令民忘者
 永不取正覺

